

前回個人研究発表 まとめ

ジュネーヴにおけるルソーの受容 ―ピクテ事件とその反響

橋詰 かすみ（本学社会学研究科博士後期課程）

近年、ジャン=ジャック・ルソーの著作の生成において、出身地ジュネーヴ共和国が果たした役割が再評価されている。その一方で、当のジュネーヴ人たちはルソーとその著作をどのように捉えていたのか。

本発表ではこのような問題意識から、ジュネーヴ市民シャルル・ピクテの書簡（1762年6月22日付）

を扱った。ピクテはここで、ルソーとその二著作『社会契約論』『エミール』の断罪（6月19日）に対する批判的文章を叙述している。発表者は、断罪の背景には「三つの真の理由」があったというピクテの主張を読み解き、ジュネーヴの政治状況とルソーとの関わりを彼がどう描いているのかを明らかにしようと試みた。

ピクテの言う「三つの真の理由」とはどのようなものか。第一に挙げられているのが「ヴォルテールを追い出したことへの報復」である。ヴォルテールは1754年からジュネーヴ郊外に居住していたが、演劇上演などのトラブルもあり1757年には退去している。支配者層にはヴォルテールと親密な者が多かったこと、この件に関してルソーとヴォルテールが対立したことなどから、ピクテはこのような仮説を立てている。

第二の理由は、「フランスへの配慮」である。フランスはジュネーヴより早く6月9日にルソーへの逮捕令を出しており、当局はこれに追従したのだと述べられている。当時の両国の権力関係を考慮すれば、これは突飛な推測ではない。

最後が、「ダランベールが執筆した『百科全書』項目ジュネーヴへの批判」である。ルソー自身はこれに対して批判的であり、彼を断罪することによって『百科全書』の記事を否定しようとしたという主張は奇妙だ。しかし神学者ジャコブ・ヴェルヌは書簡で、『社会契約論』『エミール』での宗教論によってジュネーヴ人聖職者は理神論者であるという疑いが強まるのではないかとの見解を示している。ピクテは同様の認識を共有した上で、このような推測を行っているのではないのだろうか。

この書簡は市内に流通して騒動を引き起こし、ピクテは同年7月に断罪される。他の複数のジュネーヴ人たちが書簡の中でこの問題に言及しており、またピクテ自身も批判の手紙を受け取っている。逆に、反体制派の市民たちは、自らの要求を叶えるためにこの出来事を利用した。ジュネーヴの政治状況とルソー・ヴォルテールを結びつけたこの叙述は、多くの人の関心を引きつけるものであったことは間違いない。

発表内容に対して、まず、ジュネーヴの状況に関する質問をいくつか頂いた。これについては当時のジュネーヴにおいて政治参加できるのは四身分のうち二つ（市民、ブルジョワ）だけであり、直接民主政を採用しているが実際には一部の市民が権限を独占していたということを概説的に述べたが、説明不足な点が多かった。質問の内容は、大別すると身分制度に関して、並びにピクテの批判対象である支配者層の性質に関してである。特に後者については書簡の分析において重要であるにも関わらず、明確に答えることができなかった。

次にピクテ自身に関する質問（社会的立場など）と、彼がこのような書簡を執筆した意図の不明瞭さについてご指摘頂いた。上述したように背景知識の不十分さと、用いた一次資料の少なさから、踏み込んだ分析ができていなかったと反省している。

こういったことを解決するために、ジュネーヴ史の観点から研究を捉え直す必要があると考えている。当面はジュネーヴ市文書館が公開している「小評議会の記録」の読解と、現在まで続くピクテ家の資料調査を行いたい。

また言論や出版の自由について、当時のジュネーヴ人がどう考えていたかという質問を頂き、今回取り上げなかった別の書簡からは、現代で言う「言論の自由」に近い概念を用いた叙述がみられたと回答した。こういった観点から別の事件と比較するなど、新たな問題意識からピクテ事件を解釈する可能性も考えている。